

女性外陰部ニ發生セル黒色肉腫

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/30936

女性外陰部ニ發生セル黑色肉腫

・ 金澤醫科大學產婦人科教室(主任久慈教授)

近 藤 決

女性外陰部原發性惡性腫瘍ハ子宮並ニ附屬器ノ其レニ比シテ稀有ナルモノニシテ、Guth氏ノ蒐メ得タル一一四〇ノ腫瘍症例ニ就キテ見ルニ子宮及ビ陰ニ發生セルモノ三五六三ニ對シ外陰部ニ發生セルモノ僅ニ八九例ナリキト云フ。而シテ惡性腫瘍ニ至リテハ一層稀ニシテ Hinselmann Myer氏等ハ子宮癌腫四〇ニ對シ外陰部癌腫一、則チ二五%ノ割合ナリト云ヒ Eisenhardt氏ハ六五八名ノ癌腫患者中只二例ノ外陰部癌腫ヲ認メタリト云フ。然モ肉腫ニ至リテハ尙一層稀有ニシテ、Fränkel氏ハ婦人病者ノ〇・〇一%ニ於テ是ヲ見ルト云ヒ Gunt氏ハ四八三ノ婦人肉腫患者中遂ニ一例モ其ノ外陰部ニ發生セルモノヲ見ザリキト稱ス。外陰部肉腫中黑色肉腫ハ比較的屢々アルモノニシテ、一八九九年 F. Trogler氏ノ報告以來、H. Hinselmann, P. Myer, N. Merens, G. Wiener氏等ノ記載アリ。Dieterich氏ハ二四九例ノ黑色肉腫中、外陰部ニ發生セルモノ一一例ヲ發見シ Franke氏ハ諸家ノ文籍中ヨリ蒐メ得タル一五例ノ外陰部黑色肉腫中一一例ヲ以テ確實ニ肉腫ニ屬スベキモノトナシ、又皮膚黑色肉腫最初ノ研究者タル Eisele氏ハ一八〇六年ヨリ一八六一年ニ至ル、獨、佛、英ノ文獻中ヨリ蒐メ得タル一〇四例ノ黑色肉腫中外陰部ニ發生セルモノハ一例ヲモ認メ得ザリシト云フ。又 Trogler氏ハ諸家ノ報告セル女子外陰部肉腫ノ五二例中ニ於テ確實ニ黑色肉腫ニ屬スベキモノ二〇例(三八・四%)ヲ舉ゲ Myer氏ハ諸家ノ文獻ニ徵シ之ニ氏ノ實驗セル一例ヲ併セテ三八ノ症例ヲ數フルトコロアリタリ、此外 Hinselmann氏ハ同ジク文獻ヲ涉獵シテ獲タル四六ノ外陰部黑色素腫瘍中ヨリ三二例ノ黑色肉腫ヲ確定シ之ニ就キテ統計的並ニ病理組織的研究ヲ發表シタリ。

翻ツテ我國ノ文獻ニ徴スルニ余ノ涉獵シ得タル範圍ニ於テハ未ダ其ノ報告ナキガ如シ。

實 驗 例

患者 上〇登〇、七十二歳、牛乳商家族。

既往症 患者ハ生來強健未ダ嘗テ醫門ヲ訪レシ事ナシト云フ、初經十六歳爾來整調、閉經四十五歳、十八歳ニシテ嫁シ、三男一女ヲ擧ゲタリ。

現病歴 昨年(大正十四年)七月上旬ヨリ就寢時外陰部ニ濕潤ノ感ヲ覺ヘシモ特ニ意ニ介セザリシガ、偶々一日海ニ遊ビシ際、知人ニヨリ外陰部ニ黑色ノ腫瘍アルヲ認メラレ、初メテ患者ノ注意ヲ惹起スルニ到レリ。然レ共其後此ノ腫瘍爾後著明ナル増大ヲ認メザリシガ、漸次高度ノ排尿困難ヲ意識スルニ到リ之ト同時ニ兩側鼠蹊腺ノ腫脹ヲ認メタリ。

現症 體格營養共ニ中等度、食慾亦佳良ナリ、顔面、臀部、頂部ノ皮膚ニ多數ノ夏日斑ヲ認ム、理學的検査ニヨリ、胸部其他ノ諸臟器ニ異狀ヲ認メシメズ。

以上ノ所見ヨリシテ外尿道口附近ヨリ發生セル黑色肉腫又ハ黑色癌腫ノ疑ヒノ下ニ試験的切除ヲ行ヒ、黑色肉腫ノ診斷ヲ下シ得タリ。

手術 大正十五年五月六日、腰髓麻醉ノ下ニ、腫瘍ノ全體ヲ周圍ノ健康ナル部分ヨリ、尿道ノ前部約三・五厘米ト共ニ摘出セリ。此際腫瘍ハ黑色少シク脆弱ニシテ、尿道口部ノ粘膜ヨリ發生セル觀アリ、剖面ヲ見ルニ光澤アル眞黑色ヲ呈スレ共其ノ著色ハ稍不平等ナリ。同時ニ又左右鼠蹊腺ヲモ摘出セシガ其ノ小ナルモノハ豌豆大ニ大ナルモノハ空豆大ニ達シ癒着ヲ認メズ、右方ヨリ三個、左方ヨリ五個ヲ得タリ。剖面殆ンド一樣ニ深黑色ヲ呈シ、壓ニヨリテ黑色粥狀ノモノヲ出セリ。被膜トノ癒着亦甚ダシカラズ。

手術後ノ經過 患者ハ手術後肺炎ヲ發セシガ經過良好ナリ、手術創ハ鼠蹊腺ノ部ニ於テハ第一期癒合ヲ以テ治癒セ

尿ハ黃色ニシテ殆ンド透明ニシテ異狀ヲ認メズ。

外陰部ヲ診スルニ陰核ノ直下ニ於テ外尿道口ヲ中心トシ、鳩卵大ニシテ一部ハ黑色ニ、一部ハ深褐色ヲ呈セル不正形ノ腫瘤ヲ認ム。壓ニヨリテ小陰唇並ニ大陰唇ノ内面ニ放散スル輕度ノ疼痛アリ。表面ヨリハ汚穢黑色ノ分泌物ヲ出ス。小陰唇ハ該腫瘤ニ押サレテ少ク哆開セリ。膣内ニ指ヲ挿入シテ檢スルニ前述腫瘍ノ浸潤ハ尿道ニ沿ヒテ其ノ前二分ノ一ノ部迄達セリ。

膀胱底ニ壓痛ナク、子宮並ニ附屬器其他ニ特記スベキ異狀ナシ。鼠蹊腺ハ左右共ニ腫脹シ、雀卵大乃至豌豆大トナリ、左右各數個ヲ觸レ多少ノ壓痛アリ、カナリ克ク移動セシムルコトヲ得。

シガ、原發癌ノ部ハ縫合ノ一部離開シ、其部ノ創面ハ灰白色ノ穢苔ヲ被リ、加フルニ放尿時ノ汚穢ニヨリ、「アムモニヤ」性ノ惡臭ヲ放チシガ、毎日「デーキン」氏液ヲ以テ洗滌シタルニ、其後創面清淨肉芽ノ發生良好トナリ、爾後約一ヶ月ヲ費シテ全ク治癒セリ。

顯微鏡的所見 摘出セル腫瘍組織ヲ其儘、四%「フォルマリン」ニテ固定シ、一部ハ凍結切片、他ハ「バラフィン」包埋、及ビ「ツエロイチン」包埋切片トシ、各々「ヘマトキシリンエオジン」染色法、及ビワンギーソン氏染色法ヲ施シテ檢セリ。

原發腫瘍組織 上皮層 上皮細胞ハ層狀ニ排列セラレ、多少肥厚セル部ト甚ダシク薄變セル部トアリ、上皮細胞素ハ處々稍長キ不正形ノ索條トシテ深部ニ向ヒテ延長侵入シ、其ノ狀恰モ扁平上皮細胞癌腫ノ如キ像ヲ呈セルトコロアリ。肥厚セル部ハ主トシテ種子層ノ域ニシテ、細胞ノ大サ不同ニシテ間々大ナル胞狀ニ膨大セルモノヲ認メ、處々核分裂像ヲ呈セルモノアリ。

透明層並ニ顆粒層ハ其ノ區別明瞭ナラズ。基底細胞層ハ一般ニ秩序ヨク排列シ、特別ノ變化ヲ認ムルコト能ハズ。眞皮層ニ於テハ、集簇性或ハ散在性ニ多數ノ色素細胞ノ群簇セルアリ、此等細胞ノ色素ハ深褐色乃至黑色ニシテ、一般ニ甚ダ強度ニ沈着セリ、此等ノ細胞ハ一部ニ於テ上皮層ヲ壓迫シ、基底層並ニ種子層ノ大部ヲ破潰シテ此處ニ侵入シ、或ハ遂ニハ是等ノ上皮層ヲ破ツテ外界ニ嚙出セルコトアリ。間質ト見做スベキ部ハ稀ニ色素ヲ沈着セル細長ナル細胞ト纖細ナル纖維ニヨリテ錯綜セラレ、多少ノ圓形細胞及ビ「プラスマ」細胞ノ浸潤アリ。組織ハ一般ニ血管ニ富ミ、其ノ壁肥厚セルモノアリ、又管腔擴張セルモノアレドモ色素又ハ色素細胞等ノ存在ナシ。Gussenbuer, Oppenheimer, Langhans 氏等ハ血管周圍ニ於テ特ニ著シキ色素細胞ノ存在ヲ認ムト稱スレ共、本例ニ於テハ之ヲ認ムルコト能ハズ。淋巴管腔乃至淋巴裂隙ニモ亦色素細胞ヲ認メズ。腫瘍細胞ヲ詳細ニ檢スルニ、多角不正形ノモノアリ、略圓形ナルアリ、星芒狀ナルアリ、橢圓形ナルアリ、或ハ其ノ限界相隣レルモノト接觸融合シテ分明ヲ缺クモノアリ。大サモ亦

不同ニシテ、小ナルモノハ白血球大、大ナルモノハ其ノ數倍ニ達セリ。細胞内色素亦微細ナル顆粒ヨリ粗大ナル絮片ニ至リ、多クハ平等濃密ニ胞體ヲ充タセドモ或ハ偏在性ニ存スルモノアリ、時トシテ細胞體外ニ遊離セル色素顆粒ヲ認ムルトコロアリ、一般ヲ通ジテ核ノ像ハ色素顆粒ニ隱蔽セラレテ明瞭ナラズ。

Ribbert, Oppenheimer 氏ハ此クノ如キ色素ニ富メル細胞ハ既ニ老熟ノ境ニ入レルモノニシテ死滅ニ近ヅキタルモノナリト云ヘリ。而シテ余ノ例ニ於テモ腫瘍組織ノ中心ト見做スベキ部分ノ腫瘍細胞ハ一般ニ色素顆粒ヲ有スルコト甚ダ多ク、間々過剰ナル色素沈着ノ爲メ胞體全ク崩壞セラレ單ニ大ナル色素顆粒塊トシテ殘存セルモノアリ、其他又處々ニ細長ナル桿棒狀乃至星芒狀ヲナセル比較的色素ニ富メル細胞則チ所謂 Chromatophoren? ヲ認ム。此他尙處々ニ胞狀ニシテ淡ク染色セル核ヲ有シ、色素ヲ有セズ、胞體ノ境界明瞭ナラザル細胞アリ、此等ノ色素ヲ含有セザル細胞ト色素ヲ有スルモノトハ單ニ色素ノ有無ノ點ニ於テ異ルノミニシテ其ニ同一ノ腫瘍細胞ニ屬スルモノナルガ如シ。此ノコトハ既ニ Ribbert 氏始メテ是ヲ記載シ、後 Wiener, Rösle 氏等モ亦之ヲ追證セルトコロニシテ、兩者ノ差ハ畢竟只發育ノ時期ノ差異ニシテ此等ノ細胞モ一定ノ時期ニ達スレバ色素ヲ有スルニ至ルコトハ兩者ノ間ニ移行型ノ存スルコトヲ以テ之ヲ證シ得ベシ、則チ黑色肉腫ニ於テ色素ヲ有セザル又ハ有スルコト少ナキ細胞ハ比較的幼若ナル腫瘍細胞ニシテ、退行的變化ヲ認メズ從ヒテ増殖轉移力ノ旺盛ナルニ反シ、色素ニ富メルモノハ比較的老衰ニ近キモノニシテ其レガ増殖轉移ノ能力ノ僅少ナルモノト理解スルコトヲ得ベシ。

移轉ヲ來セル鼠蹊淋巴腺ノ所見ハ標本ニ因リテ一定セズ、腺全體ノ横斷面ニ於テ是ヲ檢スルニ概シテ被膜少シク肥厚シ、腺組織ハ髓質皮質共ニ荒廢ニ傾キ淋巴細胞ノ存在疎ニシテ明カニ濾胞ヲ認識スルコト能ハズト雖モ、稀ニハ是ヲ認メ得ルモノアリ、腺間結締組織ハ肥厚セリ。色素ヲ含有セル腫瘍細胞ノ狀態ハ其ノ形狀全ク原發腫瘍ノモノト類似シ、或ハ散在シ或ハ群簇シ、時トシテ一淋巴濾胞内ヲ濃染セル色素細胞ヲ以テ全ク滿シ他ニ何物ヲモ見ルコト能ハザラシムルモノアリ、其他核ノ染色淋巴球ニ比シテ少シク淡ク、稍胞狀卵圓形ヲナシ、細胞ノ形狀橢圓形或ハ不正多角

形ヲナセル細胞ノ處々ニ群簇的ニ散在セルモノヲ認ム、此等ノ細胞ハ色素ヲ含有セザル腫瘍細胞ニシテ核ノ大小ト胞體ノ大小トハ相平行セザルモノ多シ。濾胞間結締織内ノ色素細胞ノ浸潤亦可成リニ強度ニシテ大ナル多角形或ハ長紡錘形、楕圓形等ノ色素細胞各處ニ散在セリ。然シテ又標本ニ因リテハ色素細胞ノ沈着ノ主トシテ葉間結締組織ノ部ノミニ存シ濾胞自個ハ一般ニ健全ナルモノモアリ。

抑々黒色素腫瘍ノ生理的ニ色素ノ存在スル場處ニ發スルコト多キハ周知ノ事實ニシテ *Elise* 氏ノ統計ニ因レバ一〇四例ノ惡性黒色素腫瘍中四七例ハ眼、四〇例ハ皮膚ニ發シ、内臓ニ發生セルモノ僅ニ一七例ヲ數フルニ過ギズ、而シテ此中二例ハ子宮ニ、三例ハ肝臓ニ於テ發シタリト雖モ、確實ニ子宮ニ原發セシモノナルヤ否ヤノ問題ニ就キテハ尙疑フベキ餘地アリトス。

皮膚ニ於ケル黒色肉腫ノ最モ屢々既存セル色素性母斑ヨリ發スルモノナルコトハ一般ノ認ムル所ニシテ、*Just* 氏ハ五四例ノ皮膚原發黒色素腫瘍中二三例ハ確實ニ色素母斑ヨリ發生セリトシ、*Dieterich* 氏ハ諸家ノ文籍ヨリ得タル一四五例ノ黒色肉腫中確實ニ色素性母斑ヨリ發生セリト認ムベキモノ三七例ヲ得タリト報ゼリ、然シテ彼ノ *Wiener* 氏ノ如キハ殆ンド總テノ惡性黒色腫ハ色素性母斑乃至色素性疣ヨリ發生スルモノトナシ、*Unna* 氏ハ總テノ惡性黒色腫ハ軟カキ色素性母斑ヨリ發生シ且變化セラレタル上皮細胞ヨリ構成セラル、モノナリトシ是ヲ *Nevuskeratinom* ト稱シ、*Liecke* 氏ハ色素母斑ヲ平坦ニシテ瀾蔓性ナルモノト、皮膚面ヨリ膨隆セル限局性ノモノトニ別チ、後者ヲ以テ惡性變性ノ素因ヲ有スルモノナリトセリ。然レ共 *Troglar* 及ビ *Bull* 氏等ハ女子外陰部ニ原發スル黒色素腫瘍ト既存ノ色素性母斑トノ間ニハ何等ノ關係ヲ認メズト云ヒ、*Hinselman* 氏ハ文獻中ニ於ケル外陰部發生ノ惡性黒色腫瘍四六例中色素母斑ヨリ發生セリト思惟セラル、モノ只一例ニシテ其他ノモノハ悉ク既往ニ於ケル色素母斑ノ存在ヲ否定シ得ベキモノナリト云ヒ、且ツ氏ノ實驗例二例及ビ *Meyer* 氏ノ一例ニ於テモ色素母斑トノ間ニ何等ノ關係ヲ認メ得ザルガ如シ。余ノ例ニ於テモ患者ハ局部ニ於ケル色素母斑ノ存在ヲ否定セリ。由是之ヲ見レバ黒色肉腫ハ眞ニ色素母斑ヨリノミナラ

ズ生理的ニ色素ノ存在スル皮膚ニ於テハ其ノ場處ノ何レタルトヲ問ハズシテ發生シ得ルコト明カナル所ニシテ、他ノ場處ニ比シテ生理的ニ既ニ可成リ強度ノ色素ノ沈着アル女子外陰部ニ於テ黒色腫瘍ヲ見ルコト多ク、外陰部ニ發生スル全肉腫中ニ四〇%ノ黒色肉腫アルコト敢テ怪ムニ足ラズ、然シテ此等ノ點ニ就キテハ、老年婦人ノ外陰部特ニ陰唇附近ニ於テハ可成リ屢々色素斑紋ノ出現スルモノニシテ、此レ外陰部ニ於ケル惡性腫瘍ガ他處ニ發生スルモノニ比シテ色素ヲ沈着スルモノ多キ所以ナリ。ト云ヘル Veit ノ説大イニ興味アリ。Fogel 氏ハ外陰部腫瘍發生ノ原因的要約ノ一ツトシテ外傷或ハ生殖期ニ於ケル種々ノ摩擦、不潔、帶下、汗、手淫等ノ刺激ヲ舉ゲ、患者ハ殆ンド總テ既ニ思春期、生殖期ヲ經過セル閉經婦人ノミナリト論ジタレ共、Meyer 氏ハ閉經期以後ニ於テ發スルコト多キハ單ニ高齡ニ於テ發生スルコト多キガ爲メニシテ種々ナル刺激ヲ生殖器ニ受ケタルト否トハ關スルトコロニ非ズトナセリ。Jabonlays 氏ハ黒色肉腫ノ血液中ニハ色素顆粒存在シ、血液赤血球ノ減少スル事實ヲ舉ゲ色素腫瘍ヲ以テ一種ノ病原體ヨリ發生スルモノナリトシ之ニ Melanozone ナル名稱ヲ附セリ。外陰部ニ發生セル黒色肉腫ト妊娠乃至產褥トノ關係ニ就キテハ Meyer 氏ハ何等ノ關係ヲ認メ得ズトナセシガ Alfred 氏ハ之ニ反シ外陰部黒色肉腫患者ニシテ妊娠中ニ甚ダシク増惡シ遂ニ死ノ轉歸ヲ取リタル一例ヲ報告セリ。

一般肉腫ノ比較的壯年期ニ發生スルコト多キニ拘ラズ黒色肉腫ノ老年ニ於テ發スルコト多キハ奇トスベキトコロニシテ Fogel 氏ハ拂蒐セル外陰部黒色肉腫二〇例中年齡ノ確實ニ判明セルモノ一六名ニ就キテ之ヲ分類シ、三〇歳—四〇歳一一名、四〇歳—五〇歳三三名、五〇歳—六〇歳五五名、六〇歳—七〇歳三三名、ニシテ三十七歳ヲ最低トシ七十二歳ヲ最高トシ患者ノ四分ノ三ハ閉經後ニ於テ發スルコトヲ證シ得タリ。又 Meyer 氏ノ統計ヲ見ルニ年齒ノ判明セルモノ三十八例中、二〇歳—三〇歳一一名、三〇歳—四〇歳二二名、四〇歳—五〇歳五五名、五〇歳—六〇歳一十二名、六〇歳—七〇歳八八名、七〇歳—八〇歳三三名、ニシテ五〇歳乃至六〇歳ノ間ニ於テ發生スルモノヲ以テ最多トナス。

又 Hisehmann 氏ノ統計ニヨルニ年齒ノ判明セルモノ三十一名中、二〇歳—三〇歳一一名、三〇歳—四〇歳一四名、四〇歳—五〇歳一五名、五〇歳—六〇歳一十一名、六〇歳—七〇歳一七名、七〇歳—八〇歳一三名、ニシテ其ノ五十二%ハ四十歳乃至六十歳ニ於テ發生セルモノナリ。

翻ツテ是ヲ外陰部以外ニ發生セル黒色肉腫ニ就キテ見ルモ殆ンド同一ノ狀況ニシテ Ebermann 氏ノ報ズルトコロニヨルニ、Göttingen ノ外科教室ニ於テ得タル二十六例ノ黒色肉腫患者中九名ハ五〇歳—六〇歳ニ於テ發シ全體ノ五〇%ハ四〇歳乃至六十歳ニ於テ發セリト云ヒ Eisel 氏ノ報告ニヨルニ多數ノ症例中五三%ハ四〇歳乃至六十歳ニ於テ發セリト云フヲ以テ見ルモ黒色肉腫ノ一般ニ癌腫發生ノ年齡以上ノ高齢ニ於テ發スルモノ多キヲ知ルベシ。

次ニ發生ノ部位ニ就キテ之ヲ考フルニ、Trogler 氏ノ例ニ於テハ、大陰唇ヨリ發生セルモノ六例、小陰唇六例、陰核ニ發セルモノ四例、尿道口、陰阜、會陰ニ發生セルモノ各一例ニシテ、Meyer 氏ノ例三十七名ニ於テハ、小陰唇及ビ陰核ヨリ發生セルモノ各十例、大陰唇九例、陰阜一名、膺入口境界部二名、ニシテ此等ノ統計ニ依リテ是ヲ見ルニ、本例ノ如ク尿道外口開口部ヨリ發生スルモノハ比較的稀ナルガ如シ。

是等黒色肉腫ガ、血管並ニ淋巴管系統ニヨツテ甚ダ早期ニ轉移ヲ生ズル傾向ヲ有スルコトハ周知ノ事實ニシテ就中近接セル淋巴腺則チ鼠蹊腺ニ先ヅ最初ニ顯著ナル移轉竈ヲ構成スルハ一般ノ認ムル所ナリ、乃チ Meyer 氏ハ三十八例中二十一例ハ鼠蹊腺ニ移轉ヲ有シタリト云ヒ、Trogler 氏ハ十六名中十五例ニ於テ悉ク鼠蹊腺腫大ヲ見、就中七例ニ於テハ既ニ全ク黒色肉腫變性ニ陥リ居タリト云フ、然シテ余ノ例ニ於テモ亦鼠蹊腺ハ兩側共既ニ全ク黒色肉腫ノ轉移ヲ來セルコト前ニ述ベタルガ如シ、然シテ又臨床上全ク鼠蹊腺ニ轉移ヲ認メ得ザルガ如キ場合ニ於テモ、手術後ニ至リ其處ニ再發ヲ見ルコトアルハ屢々報告セラレタルトコロニシテ Wiener 氏ハ一女子ノ外陰部黒色肉腫ニシテ觸診上鼠蹊腺ニ何等ノ異常ヲ認メ得ザリシヲ以テ、手術ニ際シテ是ガ摘出ヲナサバリシニ手術創ノ全ク治癒セル後數ヶ月ニシテ既ニ鼠蹊部ニ再發セルモノヲ見タリト稱ス。故ニ此等外陰部惡性腫瘍ノ手術ニ際シテハ其ノ轉移ノ有無ニ拘ラズ

必ズ近接セル淋巴腺、殊ニ鼠蹊腺ヲ共ニ摘出スベキハ多言ヲ要セザルノ事ナリ。

黑色肉腫ノ死亡率ノ甚大ナルハ論ヲ俟タザルトコロニシテ從來該腫瘍ノ手術後ニ於テ理想的根治ヲ得タルモノハ甚ダ少ナク、Eiselt氏ノ如キハ黑色肉腫ハ例外ナシニ死ニ終ルモノナリト云ヘリ。

Hinselmann氏ハ外陰部黑色肉腫ノ患者中其ノ生死ノ判明セルモノ二十五名ニ就キテ之ヲ調査シ、死ノ轉歸ヲ取リシモノ二十二名ニシテ手術後ノ生存期間平均四ヶ月半餘、治癒セリト認ムベキモノ三名ニシテ最長ハ手術後十三年ニシテ健康ナリキト云フ、然シテ其ノ死亡率ノ八六三%ナルコトヲ示セリ、尙Frobenius氏ハ豫後ノ判明セルモノ十六名中ニ於テ死ノ轉歸ニ到リシモノ十三名、手術後ノ生存期間最長九ヶ月、最短二週間、治癒セルモノ三名(最長ハ十二ヶ年後未ダ全ク健)ニシテ其ノ全死亡率ハ七七%ナルヲ示セリ、然シテ治癒セルモノ三名ハ手術ニ際シテ同時ニ鼠蹊腺ヲモ摘出セシモノナリト云フ。余ノ例ニ於テハ手術後尙三ヶ月ヲ經過セルノミナルヲ以テ未ダ其ノ豫後ニ就キテ何等確實ナルコトヲ斷ジ得ベカラザルハ勿論ナリト雖モ今日尙未ダ何等再發ノ徵候ヲ見ズ。

外陰部發生ノ黑色肉腫ハ實ニ多種多樣ニシテTregler氏ノモノ、内組織的構造ノ明カナルモノ十一例中、紡錘形細胞ヲ混ズルコト多キモノ五例、圓形細胞肉腫ト思ハル、モノ五例、明カニ胞巢狀肉腫ニ屬スルモノ一例ヲ數ヘ。Hinselmann氏ハ氏ノ蒐集セル例三十二名中紡錘形細胞肉腫七例、圓形細胞肉腫ニ屬スベキモノ六例ニシテ他ハ總テ明瞭ナル組織的ノ記載ヲ見ズト云ヒ、氏自身ノ實驗セルモノハ多形細胞肉腫ナリシト云フ。然シテ余ノ例ハ前述セルガ如ク腫瘍細胞ハ大小不同、其ノ形狀モ亦種々雜多ニシテ、胞巢狀ノ構造ハ明カニ之ヲ認ムル能ハザリシモノニシテ、多形細胞肉腫ニ屬スベキモノナルガ如シ。

次ニ黑色肉腫ニ就テ興味アルハMelanurie及メlanuemieナリ、前者ハEiselt氏ニヨリテ初メテ稱ヘラレ爾後Jaksch及メGussenbauer, Finkler等ニヨリテ精細ニ研究セラレタルモノニシテ、此等諸氏ノ論ズルトコロニヨルニ黑色肉腫患者ノ尿中ニ暗黑色ノ「メラニン顆粒」或ハ無色ノMelanogen (Chromogen)出現スルコトアリ、而シテ「メラノ

「ゲン」ハ是ヲ空氣中ニ放置スレバ漸次酸化セラレテ黑色ノ「メラニン」トナルト云フ、然シテ Throger 氏 Fricke 氏等ハ此ノ「メラヌリー」ヲ以テ黑色肉腫内臟轉移ノ確實ナル徴候トナセリ。余ノ例ニ於テハ尿中ニ「メラニン」ノ出現ヲ認メザリキ。

色素ノ試験

黒色素腫瘍ノ色素則チ「メラニン」ノ由來ニ關シテハ未ダ確證ナキモノ、如シ、今文獻ニ得タル主ナル先人ノ所説ヲ見ルニ、酸化醱酵素ノ作用ニヨリテ無色ノ蛋白質ヨリ成生セラル、モノナリト説クアリ Ribbert 氏一派)、或ハ血液性本源ヲ説クモノアリ (M. b. Schmidt) 血色素ノ滲透説ヲ稱フルモノアリ (Gussenhauer)、或ハ脂肪組織ニ由來スト云フモノアリ (Krankenbergs)、或ハ又不明ナル寄生蟲ノ影響スルトコロナリト説クモノアリ (Jürgens) テ一致セズト雖モ、要スルニ蛋白質ヨリ成生セラレタル一種不明ノ蛋白質體ノ一群ニシテ、硫黃ノ含量多ク、其ノ化學的性質ニ於テモ各々同一ナルモノニアラザルコトハ一般ノ信ズルコロナルガ如シ、然モ一般的ノ特質トシテ色素ノ褐色ヨリ黑色ヲ帶ビ、種々ナル溶解劑ニ抵抗強ク、只熱アルカリ「ニ」ミ溶解シ、鍍銀法ニ對シテ陽性ナルコト等ハ他ノ色素ト區別シ得ルトコロナリト云フ。余ハ其ノ得タル標本ニ就キテ左ノ如ク檢セリ。

一、漂白作用過酸化水素液ニ浸スコト二十四時間ニシテ帶紫褐色ニ變ゼリ、マイエル氏ノ漂白法ニ依リ凡ソ一晝夜ニシテ完全ニ漂白セラレタリ。

一、溶解劑ニ對スル試験 硝酸、鹽酸、硫酸等ノ濃厚ナル溶液ヲ作用セシムルコト二十四時間ニシテ只僅ニ組織ノ崩潰セルヲ見タルノミニシテ殆ンド變化ナシ。

濃厚ナル加里滷汁ヲ作用セシムルモ殆ンド褪色セズ。中性溶解劑「アルコール」、「エーテル」、「キシロール」等ハ如何ニ長時間作用セシムルモ何等變化ヲ醸サズ。

「メラニン」ノ鐵成分ノ含否ニ關シ Virchow Virgel 氏等ハ人體ニ存スル「メラニン」ハ馬ニ於ケルモノ、如ク鐵分ヲ

含有セズト云ヘドモ、一方又是ガ存在ヲ稱フルモノアリ。然シテ黑色肉腫中鐵反應ノ陽性ヲ見ルコトハ屢々アルモノノ如ク Mörner, Hirschberg, Vossius 等ノ諸氏ハ此ノ黑色腫ノ常有成分ナルコトヲ主張セリ、然レドモ此際黑色肉腫組織中ニ屢々出血來リ、其ノ Metamorphose ニヨリテ發生セル、「ヘモヂェリン」ガ此處ニ沈着シテ鐵反應ヲ呈スルコトアルハ注意スベキコトニシテ、Meyer氏ノ稱フル如ク、所謂出血性肉腫ナルモノニ於テハ肉眼的ニ其ノ色調全ク黑色肉腫ト同様ナルヲ以テ是ヲ以テ往々黑色肉腫ナリト認メ、其ノ當然現ハルベキ鐵反應ヲ以テ直チニ黑色肉腫ノ反應ナリトスルコトアルハ事實ナルガ如シ、Bouché氏ハ黑色肉腫ニ於テ鐵反應ヲ見ルハ該腫瘍ノ含有スル「ヘモヂェリン」ノ量ニ關スルモノニシテ眞ノ黑色肉腫ハ鐵ヲ含有セズト云ヘリ。又 Solinick氏ハ分解シテ液狀トナレル「クロマトフォレン」ノ色素ハ鐵ト結合スル性質ヲ帶ブルニ至ルモノニシテ、其ノ溶解セラレタル狀態ニ於テ遇然ニ接觸スルモノナラント說ケリ、然シテ又「メラニン」ノ血液性本源ヲ稱フル Schmidt氏ハ年齡ト共ニ血色素ハ變化シテ漸次黃↓褐↓黑色トナリ其ノ鐵反應ハ早期ニハ存スレ共、後ニ至ツテハ遂ニ消失スルモノナリト論ゼリ。是ニ對シ Cornil, Ranvier氏等ハ黑色素腫瘍ノ色素ハ始メヨリ黑色ヲ帶ブルモノニシテ、黃色乃至紅色ノ階級ヲ通過スルモノニアラスト云ヘリ。余ノ例ニ於テハ鐵反應ハ全ク陰性ナリキ。

結 論

本例ハ七十一歳ノ婦人外陰部尿道口附近ノ皮膚真皮層ニ原發性ニ發生セル黑色肉腫ニシテ、病竈ノ組織ハ鏡檢上胞巢樣ノ構造ヲ認ムル能ハズ、腫瘍細胞ノ性質ハ多形細胞肉腫ニ屬スルモノニシテ色素沈着ノ不規則ナリシモノナリ。外陰部發生黑色肉腫ノ手術ニ際シテハ其ノ轉移ノ有無ニ拘ラズ必ズ鼠蹊腺ノ摘出ヲ行フベキモノト信ズ。

擲筆スルニ當リ恩師久慈教授ノ御指導ト御校閲ヲ深謝ス。